

日本語教室を通して国際交流

伊賀日本語の会(三重県上野市)
http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Sakura/2936/

忍者の里からエスニックタウンへ

松尾芭蕉の生誕地として、忍者の里として有名な伊賀上野。自動車部品工場などが多いこの地域では、入管法の変更に伴い、平成2年から南米系や東南アジア系の外国人が増加。平成元年には614名だった外国人登録者が、平成5年には1,338名となり、様々な国籍の人々が暮らす「エスニックタウン」としての特色をもつようになった。

そんな中、すでに他地域の日本語教室でV活動を行っていた一人のボランティアが「伊賀地方でも日本語教室を」と、地域の広報誌等でボランティアを呼びかけ。約20名の日本人ボランティアが集まり、平成5年8月に会が発足。こうして、同年10月より日本語教室がスタートした。

「日本語教室」と「いろはキッズ」

日本語教室の実施状況

場 所: 上野市ふれあいプラザ
対 象: 伊賀地区(上野市・名張市・阿山郡・名賀郡)に住む外国籍の方
時 間: (毎水曜日) 20時~21時30分
(毎土曜日) 19時~20時30分
授業料: 1回200円

水曜日の授業は、「会話」を中心とした日本語実践レッスンで学習者のレベルに合わせて3クラス。土曜日は初級から上級、漢字学習、日本語検定など計6クラス。また、昨年4月から小中学生を対象に「いろはキッズ」教室もスタート。これは、外国籍の子どもの日本の小中学校に編入されるなか、言葉のハンディによって学科授業についてゆけない子どもたちをサポートしようとの想いで始めた取り組み。親子で参加できるのが特徴で、数学や英語を中心にボランティアがマンツーマンで教えている。



同じ市民として一緒に町づくりを進めたい

「伊賀日本語の会」事務局長 菊山順子さん

上野市では、現在2,963名の外国人登録があり、人口に占める割合は約4.7%。特に最近では、外国籍の子どもの「教育の遅れ」は重要な地域課題となっています。

私たちは、日本語学習を活動の中心にしていますが、単に日本語を教えるのではなく、「日本人と外国人の相互理解を深めたい」との想いで活動を行っています。外国人が日本語を理解

昨今の世界情勢から「難民の支援」「国際協力NGO」といった言葉を聞く機会が多くなりました。また、私たちが暮らす身近な地域の中にも外国人の姿を見かけることが増えました。それにとめない、ボランティアセンターにも国際協力に関する相談が寄せられています。そこで今回の特集は、国際交流・国際協力の活動事例を取り上げ、その活動状況やボランティアの関わりについてまとめてみました。国際分野でのボランティア活動について、みなさんもぜひ参考にしてみてください。



ちゃんと問題解決したかな?(いろはキッズの様子)

なお、講師となるボランティアは約40名で、ほとんどが就労しながらの活動である。特に外国語能力や教員免許の有無は関係ないが、「日本語の教え方」は不可欠なので、専門の学習をしていない場合は、県内の日本語教室ネットワークが開催する「日本語サポーター講座」の受講を義務づけている。

「高校に合格し自信がついた。今度は日本語検定にも挑戦したい」と喜ぶ声も聞かれるなど、現在、約100名の外国人が同教室で学んでいる。

様々なイベントを企画し、交流を深める



上野市のイベントに音楽バンドとして参加

同グループでは、日本語学習のほかにも、地域との交流を目的としたイベントを企画。ボランティアや学習者、家族などが集まりバーベキューパーティーを開いたり、地域のイベントに外国人バンドが参加することも。最近では、地域から「外国人を講師に招きたい」「外国人との交流イベントを企画したい」などの要望を受けるなど、地域にだけだグループへと発展している。

することは日本人への理解につながるし、地域の人たちにとっても日本語を学ぶ外国人を見ることでより身近に感じるものです。そのため、地域や学校が行うイベントがあれば、時間が許す限り積極的に参加しています。

また、教室での出会いを通じて、国籍の違う外国人同士が結婚するなど、日本人と外国人との交流だけでなく、実は外国人同士の交流にもつながっています。

「日本人は、外国人をお客さま扱いする」と言われますが、日本人も外国人も同じ地域に住む市民として、一緒に町づくりをしていけるような環境づくりをめざしています。

植林を通して住民の生活回復を支援

緑のサヘル(東京都江東区)
http://www.jca.apc.org/~sahel/

砂漠化防止と住民生活の改善を目的に

アフリカ・サハラ砂漠の南縁部はサヘル地帯と呼ばれ、砂漠化による慢性的な食糧不足が深刻な問題となっている。「緑のサヘル」は、サヘル地域での砂漠化防止と現地住民の生活改善を目的に平成3年3月設立。現在、チャド共和国とブルキナファソ国を中心に活動を行う国際協力NGOである。



森は自分たちで作る、守ろう

同団体の活動理念は3つ。「緑を増やす」「緑を減らさない」「住民生活の改善」で、その中心となるのが「植林活動」である。活動当初、現地入りしてまず行ったのが、大規模な育苗所の設置。そこで苗木を生産し、住民に無料配布、村落内に植林していった。植林の種類は様々だが、調理用カマドや灯りなど燃料用の「薪炭材」や「建築材」、食生活改善や現金収入のための「野菜・果樹栽培」など。

また、地域内での穀物流失を防ぐための「穀物銀行」、燃料消費を抑える「改良カマドの製作・普及」、良質な水を得るための「井戸の掘削」など、植生保護や生活改善の支援活動を展開。



住民の自発的な参加が大きな成果です

「緑のサヘル」事務局 室岡 桂さん

昨年、創立10周年を迎えた当団体では現在、国内4名と海外4名による日本人スタッフ、現地住民スタッフ19名が有給専従スタッフとして活動しています。これまでアフリカ・サヘル地域で植林を中心に砂漠化防止への様々な取り組みを行ってきましたが、現地入りした当初は、住民は「森は神が授けるもの、自然にできるもの」という考えでした。しかし数年前からは「自分たちで苗木を生産しよう」と、各村ごとに小規模育苗所がで



さあ、みんなで苗木を植えよう!

これら3つの活動を行ううえで最も大切なのは、「住民参加」。現地スタッフによる技術講習や環境講習を通して、住民の意識向上を図るとともに、住民自身による自発的・継続的な活動をめざしている。「森は自分たちで作る、守ろう」。これが同団体の最終的な想いだからだ。

会員確保をめざし、多彩な広報活動を展開

NGOでは、「活動資金」の確保も大切な活動。同団体では、安定した運営費を得るために会員を募集し、会費を集めている。そして、より多くの会員を確保するために様々な「広報活動」を行っている。

まず、市民向けに「報告会」を実施。これは、帰国した海外スタッフによる現地の活動紹介で、年に4回ほど行っている。また、会員向けに「ニュースレター」を発送し、現地での様子を報告。ほかに「カレンダーの制作・販売」も。

昨年には、広報活動の一環として「サイクルキャンペーン2001」を実施。北海道から鹿児島まで自転車で走り、全国各地で講演活動を行うなど、多彩な広報活動を展開している。



列島縦断 2,470kmを走破しました!

きるなど、「森は自分たちで守り、育てるもの」と住民たちの意識が変化してきました。木を植えることも大切ですが、こうした住民の自発的な参加こそが大きな成果だと思います。

事務局では常時ボランティアを募集しており、現在は4名のボランティアさんが私たちの活動をサポートしてくれています。具体的な作業としては、現地から届いた写真の整理やニュースレターの発送、ホームページの作成・更新などの事務作業。また在宅でもできる活動として、フランス語の翻訳があります。採用条件として、出勤日数や時間は特に設けていませんので、私たちの活動に興味があり、継続して活動を行えるという方がいたら、ぜひお問い合わせください。

国際分野にもっと詳しくなろう!

国際協力NGOの活動を支援する市民団体があるのをみなさんをご存じですか。
ここでは、「国際協力NGOセンター」を紹介するとともに、
国際分野のボランティア活動を行うために知っておきたい留意点をまとめました。

国際協力NGOの力強い味方です!—— 特定非営利活動法人 国際協力NGOセンター(JANIC)

設立経緯

日本における国際協力NGOは、他分野のNGOに比べて数も少なく、規模も小さい。また、団体の多くが海外での活動であるため、活動状況や成果が市民に認知されにくく、関心をもつ機会が少ないのが現状です。

資金的な課題を抱えるNGOが、国際協力の必要性やNGO活動の重要性をばらばらにPRしながら、支援者を増やすには効率的ではありません。

そこで、日本国内で国際協力やNGOに関して専門的に広報したり、NGOがより活動しやすい社会づくりを進めることを目的に、87年「国際協力NGOセンター」(以下、JANIC)が設立しました。

主な活動

1.人材育成

- ・国際協力NGOの新人・中堅スタッフ向け研修会の開催
- ・NGOスタッフのスキルアップセミナーの開催
- ・その他、各種学習会・研修会・講座の開催など

2.情報普及・広報

- ・出版物の紹介・販売
- ・機関誌の発行
- ・NGO入門セミナー、NGO就職ガイダンスの開催
- ・各種イベントへの参加・展示など

3.調査研究・提言活動

- ・NGOダイレクトリー(国内NGO約400団体を収録した日本で唯一の国際協力市民団体要覧)の発行

- ・関係機関・省庁との定期協議会への参加など

4.ネットワーク構築

- ・海外NGOとの情報交換・連携
- ・国内外の関係団体との情報交換・連携など

<お問い合わせ先>

〒101-0054

東京都千代田区神田錦町2-9-1 齊藤ビル5F

TEL.03-3294-5370/FAX.03-3294-5398

Eメール:global-citizen@janic.org

URL:http://www.janic.org/

「市民国際プラザ」ってなに?

近年、地方自治体でも様々な国際協力活動が展開されています。同プラザは、NGOと自治体が連携し、地域の資源や特色を活かしながら、より効果的な国際協力活動を推進することを目的に平成11年に設置されました。

主な活動は、

・自治体やNGOに関する情報収集・提供とPR活動

・国際協力に関するノウハウの提供

・国際協力を担う人材の育成

で、JANICと(財)自治体国際化協会が共同で管理・運営しています。

<開館時間> 10:00~18:00(月曜日~金曜日)

<場所> 東京都千代田区霞が関3-3-2 新霞が関ビル・ロビー階

<お問い合わせ先> TEL.03-3519-7581/FAX.03-3519-7597

国際協力活動を行う前に知っておきたいポイント

まずは世の中の課題を把握しよう

国際協力とは、そもそも「社会課題を解決するための支援活動」です。国際協力の第一歩は、国内外を問わず、社会課題に気づくこと。そして、その課題に対し、自分はどのように関わっていくかを考えることが大切です。

国際協力ボランティアと福祉ボランティアとの違いを認識しよう

国際協力ボランティアというと、「海外(途上国)に行って、国際貢献を」とイメージする方が多いかもしれません。しかし、海外でのV活動はよほど専門的なスキルや知識をもっていない限り、

まず参加は無理。

実際にボランティアが関わられるのは、パソコン入力や郵便物の発送、写真の整理、翻訳、ホームページの作成、イベントスタッフなど、国内での事務作業です。

NGOスタッフへの近道は、ボランティア活動から

国際協力への関心が高まるなか、NGOへのスタッフ希望者が年々増えています。書籍やホームページなどで情報を得ることも大切ですが、可能であれば、自分が興味をもつ活動やNGOにボランティアとして参加してみましょう。NGOの活動を理解するチャンスであるとともに、スタッフへの近道かもしれません。



家族で話し合うことから始めよう

特定非営利活動法人 国際協力NGOセンター(JANIC)
事務局長
山崎唯司さん

日本の国際協力NGO約400団体のうち、JANICの正会員68団体で日本の国際協力NGO全体の年間予算の約80%を占めます。私たちはそれぞれのNGO同士がお互いに情報交換や協力をしていくためのコーディネーターとしての役目を担っています。

国際協力NGOが慢性的に抱えているのが、「活動資金」の問題です。資金確保の社会的な仕組みづくりを進めるためには、そ

もそも市民の関心を高めなければなりません。そのためにも、途上国で起きている諸問題を市民に知らせたり、NGOの活動をPRすることが必要です。また、NGOは一般的に給与が低いため、人材が集まりにくいのが現状なので、勉強会や研修会などを通じてそれをカバーするためのスキルアップを図っています。

しかし、市民に関心をもってもらうために最も重要なことは「家庭のしつけ」。つまり、社会の課題について親御さんが話題提供すれば、子どもも自然と関心を持つものです。海外現地やNGO事務所に行って活動することがV活動の全てではありません。国際分野でのV活動の第一歩は、家族とともに話し合うことだと思います。